
ポチの実力

ふによ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポチの実力

【Nコード】

N5459S

【作者名】

ぷによ

【あらすじ】

小さな萌が散歩で通り掛かった道端に、白い猫が現れた。

その日は風が強かった。風が道路に置かれたバイクを覆うカバーの中に入り込んで膨れ上がり、さながら風船のように煽られた勢いで右へ左へと泳いでいる。木々も同じように枝を揺らし、ガサガサと音を立て、たくさんの葉が風下へ飛ばされて行った。

そこへ小さな女の子がよちよちという感じで通り掛かった。名前を萌という。萌は変幻自在に形を変えるカバーの動きに、興味津々という感じで瞳を輝かせた。自分の方へ向かって膨らんで来るそれを、小さな手でばんばんと叩いては笑い声を上げた。

何度も叩いていると、突然カバーの下から猫が顔を出した。驚いた萌は一步後ろへ下がり、しげしげと真っ白な猫の顔を見詰めた。ちよっと手を出しては引っ込め、逃げない事が分かると、しゃがみ込んだ萌はそっと手を伸ばしてその頭を撫でた。

「触るんじゃねーよ」

萌は大きな目をさらに大きくして尻餅を着いた。

「ママー、猫がしゃべったー」

子供の後をのんびりと歩いていた母親に駆け寄った萌は、「しゃべった！ 猫がしゃべったんだよ」と大騒ぎだ。

「ホントに？」と母親が首を傾げ、萌の指さす方を見るとそこに猫の姿はなかった。

萌を抱きかかえ、不思議そうに首を回す彼女の頭を撫でながら、ふたりは角を曲がって行った。

翌日。再び萌は同じ場所へやって来た。今日は風もなく穏やかで、カバーは萎んだままだ。

その端を持ち上げては中に頭を突っ込み、萌は猫を捜した。しかし大型バイクのタイヤが見えるだけで、他には何も見当たらない。

「いないなあ」

諦めた彼女は道路をあちらこちらと動き回った。そしてふと振り返ると猫がいた。

「いた!」

昨日と同じようにカバーの下から顔を出して、萌を見詰めている。そっと近付いた萌は、隠し持っていたお菓子を猫の顔の前にぶら下げた。首を伸ばしてそれをぺろりと食べた猫に、萌は手を叩いて喜んだ。

「うまいんだなー」

今度こそ萌はびっくりした。やっぱり口をきいた。母親を呼んで、早く早くと手招きする。

でも走って来た母親が辿り着いた時、やっぱり猫はいなくなっていた。

そして又翌日。三たび萌の前に現れた猫は、「なんかくれよ」とエサを催促したのだった。

警察官が不審な若者に職務質問していた。バイクの後ろに隠れてしゃがみ込み、じっとしていたからだ。

「名前は? 職業は?」

「林です。……大学生です」

あくまで威圧的な警察官の態度に、林はしどろもどろになっていた。

「それで? ここで何してたの?」

それは勘弁してくれ、という感じで林は困り顔になった。それでも彼は解放してくれそうもない。

上目遣いで警察官にちらちらと目をやりながら、やがて観念した林は重い口を開いた。

「実は……………」

数日前。小さな女の子が散歩で通り掛かった時、ふざけて飼っていたポチを放して、適当にしゃべった風を装ったらその子がとても喜んでくれた。

次の日。やって来たその子が必死でポチを捜しているのを見てかわいそうになり、もう一度同じ事をしてあげた。

そうなると思えるきっかけを失って、毎日やるようになってしまった、と。

呆れたように顔を見詰めてくる警察官に、林は返す言葉もなかった。

「あ、あの子です」

そこへちやうど萌が歩いて来るのが見えた。

「ちよつと奥に行つてくれませんか」

そう言つて警察官を表から見えない所に押し込んでから林が指を鳴らすと、どこからともなく現れた白い猫が彼の足下に寄り添い、喉をごろごろと鳴らした。

今日は小さなビニール袋を手にとって萌が走つて来る。そしていつものように辺りを見回すと、猫が来るのをじつと待った。

今日こそは正体を確かめようと母親も一緒だった。

林が屈んでポチの喉の辺りを擦ると、のろのろと所定の場所まで歩き、そして萌の前に顔を覗かせた。

「いた、いた！」

萌は母親と並んで、持って来たバスケットを与え始めた。

そして粉を撒き散らしながらばりばりとバスケット食べ終えたポチは、ふたりの顔を見上げて、「サンキュー」と礼を言った。

「ほらね、しゃべったでしょう？」

得意気な萌に母親は口もきけないでいる。

そんなふたりを尻目に尻を向けたポチは、立てた長いしっぽを振りながら悠々と去って行った。

林は警察官と顔を見合わせていた。そしてお互いに、「何かしたのか？」と指を差し合い、二人同時に首を横に振った。

そんなバカな……。

しゃがみ込んだままの親子に視線をやった二人は、口を開けたまま再び顔を見合わせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5459s/>

ポチの実力

2011年10月8日19時37分発行